

ほっと通信

令和7年9月号

生活の中の
仏教語

末法の世を生きる -お釈迦さまのことばから-



ほっと通信編集委員 佐藤徳郎（釈 徳法）

お釈迦さまは、『阿弥陀経』の最後に、お釈迦さまの在世当時の世の中が、すでに様々な濁りに満ちていて、汚れきった時代の中、思想は乱れ、煩惱は激しくさかんであり、人々は悪事を犯すばかりであることを嘆かれ、そのように人間も社会も悪に染まった世界を五濁悪事悪世界（ごじよくあくじあくせかい）と説かれました。

私たちが暮らしている現代社会も、まさに五濁悪事悪世界、戦争や災害も相次いで起こり、世の中が騒然としているように感じます。

世界のどこかで紛争が絶えることはなく、日本をはじめ各国で大規模な自然災害も多発しています。さらに、コロナウィルス感染症の蔓延、地球温暖化によると言われる、これまで経験したことのない夏の猛暑、各地の大雨などの異常気象は、何れも自然環境を破壊してきた人間への地球からの報復かもしれません。また、人間が殺されない日はないと言ってもよいくらいに繰り返される凶悪犯罪など、心の重くなるニュースばかりが耳に入ります。

末法（まっぽう）という言葉が耳にされたことがあるかと思いますが、これは、お釈迦さまが亡くなられてからおよそ二千年後にやってくる混迷の時代のことを言います。真実が見えにくくなり、不実そのものの中で人間が苦悩する時代と言ってもよいかと思います。この思想は、単なるお釈迦さまの予言などではなく、仏法の深い時代観、歴史観にもとづく人間洞察であると言えるでしょう。

今、私たちはこれほど文明の進んだ二十一世紀に暮らしています。しかし、胸のうちは閉塞感で一杯で、文明の進展により、むしろ人間は退化しているのではないかとさえ思えます。まさに、末法そのものという感を深くしているのは、私だけではないかもしれません。

このような時代を生きるには、「どうしてこんなことが起きるのか」と考えることも大切ですが、一切衆生(いっさいしゅじょう)を摂取(せつしゅ)して捨てないという仏さまの大きな心(仏がすべての人々をおさめ取って救うこと)を拠り所としながら、「こうなった今、私はどうすればよいのか」ということを、私たち一人一人が考え自分自身の心を養っていくことが、ますます必要になってくるのではないかと思いますのですが、皆さんはどうお感じになられるでしょうか。

北海道小樽市 真宗木辺派潜龍寺衆徒
宮城県石巻市在住

(922字)
